

日本におけるジェイン・オースティン書誌

— 翻訳・翻案書目 2 —

田 村 道 美

凡例

1. 本書目は、1868 [明治元年] より2003 [平成15] 年8月までの間にわが国で刊行されたジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の作品の翻訳・翻案についての書目である。
2. 本書目作成に当たっては、1点を除いてすべて筆者架蔵本について記事を採用した。架蔵していない1点 (「河出世界文学大系」第16巻として刊行された阿部知二訳『高慢と偏見』) についても、所蔵図書館より借り受け、実物に当たった。
3. 項目の排列は刊行順とし、各項目の前に通し番号を付した。ただし、上・下2巻で刊行された場合には、1-1、1-2という番号の付し方をした。
4. 項目の記載は、訳書名、訳者、初版発行年月日、発行所、定価、収録作品、体裁、構成、表紙・カバー・帯の解説文ないし惹句、使用原書の順とし、最後に筆者による解説を付した。
5. 訳書名は、原則として表紙および扉に記載のものを採り、表紙・扉・奥付等の記載の間に相違がある場合には解説にその旨を記した。なお、訳書名等の漢字・仮名遣いは原本の表記に従った。
6. 初版刊行年については、奥付の記載が元号の場合は西暦に換算し、元号は [] 内に示した。奥付の記載が西暦の場合にも、一貫性を考えて、[] 付きで元号を付した。また、奥付等の数字が漢数字の場合はアラビア数字に改めた。
7. 使用原書については、訳者が解説等で使用した原書を明記している場合、その箇所を「」を付してそのまま引用した。
8. 筆者の解説の冒頭に、訳書の原題とその初版発行年を示した。ただし、少女期の作品については推定執筆年を示した。
9. 訳書の多くでオースティンの肖像画が口絵として使用されている。オースティンの肖像画は姉カサンドラのスケッチ画 (ロンドン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー蔵) が唯一のものであるが、別に、甥ジェームズ・エドワード・オースティン＝リーが『思い出のジェイン・オースティン』(1870) 刊行に際して、その巻頭を飾るためにアンドルーズなる画家に依頼した肖像画がある。口絵等がカサンドラのスケッチ画の場合は、口絵の後に (カサンドラ筆) を、アンドルーズ氏の手になる肖像画の場合には (アンドルーズ筆) を付した。

7-1 『エリナとメアリアン (上) 』

訳 者 伊吹知勢

初版発行 1947 [昭和22] 年12月15日

発行所 新月社

定 価 80円

収録作品 『エリナとメアリアン』（第1章—第29章）

体 裁 18.5×13.2cm。厚紙装、角背、カバー付。

構 成 扉、序（pp.3—8）、本文（pp.13—281）。

使用原書 「Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」

解 説 *Sense and Sensibility* (1811) の本邦初訳本である。英米名著叢書12として刊行された。

伊吹知勢（1906—1983）は英文学者。奥付の訳者略歴には「東京文理大卒、現在東京女高師教授」とある。『オースティンとウルフ——伊吹知勢論文集——』（伊吹令人、1984〔昭和59〕年4月11日）の「伊吹知勢略歴」を見ると、「昭和18年9月 東京文理科大学英語学英文学科本科卒業」、「昭和18年10月 東京女子高等師範学校助教授」、「昭和24年3月 東京女子高等師範学校教授」とあるから、本訳書刊行当時の正確な身分は助教授であった。伊吹は、‘A Wife’s Argument’ (1) [*Sense and Sensibility* 第2章の訳] を『英語青年』第93巻第1号（1947〔昭和22〕年1月）に、‘A Wife’s Argument’ (2) を『英語青年』第93巻第3号（1947〔昭和22〕年3月）に発表している。これが機縁となって *Sense and Sensibility* の翻訳を依頼されたと思われる。

本訳書に挿まれている「新月社英米名著叢書行」の郵便はがきには、切り放して手許に残せるようになったはがき大の用紙が付いている。その用紙には次のような同叢書刊行の趣旨が印刷されている。「本叢書は英米文學中の世界文學としても不朽なるべき悠久の価値ある名著を組織的に選び、標準的的一大翻譯叢書を繼續刊行せんとするもの、大方の御期待と御支援を乞ふ。第1期刊行豫定約150冊。」また、「上製本刊行」について次のような説明がある。「従來の並製を改め第12巻より（既刊分については再版以後）厚表紙綴上製本として刊行いたします。尚本文用紙その他の質の向上については、第16巻以後逐次改良いたします。」この『エリナとメアリアン』上巻から上製本になったことがわかる。

伊吹は「序」の冒頭で、オースティンの文体について次のように述べている。

ジェーン・オースティンの小説を読んで先づ第一に気をつくのはそのきびきびした文体である。上等な懐中時計が秒をきざむ様な、明るく澄んだリズムである。科学上の論文でもかうはゆくまいと思へる程はつきりと然もよどみなくさらさらと言つてのける趣きは、訳文に伝へることの不可能なものではなからうか。不可能か可能かはともかくとして私はその様な大それた野心は全然おこさなかつた。原文の名誉のために、言訳を先づこれだけ申し上げて、原文の天衣無縫性については、実物についておたしかめ戴き度いと希望する次第である。

伊吹は「序」の末尾に、「附記。Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」と記しているが、調査の限りでは、このような原書は存在しない。Egerton とは *Sense and Sensibility*, *Pride and Prejudice*, *Mansfield Park* を最初に出版したロンドンの出版業者 Thomas Egerton とされる。ちなみに、*Emma*, *Northanger Abbey*, *Persuasion* は同じくロンドンの出版業者 John Murray が出版した。ところで、1832年にロンドンの別の出版業者 Richard Bentley は自社の Standard Novels シリーズにオースティンの小説を加えることとし、オースティンの兄ヘンリーや Egerton の遺言執行者 Francis Pinkney と交渉し、オースティンの作品の版權を獲得した。R. Bentley は早速翌年にオースティンの6作品を刊行した。当然、扉の下部には Richard Bentley とある。したがって、1832年以降の版の扉に Egerton の名があること自体奇異なことになる。

伊吹は本訳書刊行から6年後の1953〔昭和28〕年6月、『お茶の水女子大学人文科学紀要』第3巻に「Jane Austen and *Sensibility—Sense and Sensibility and Sensibility*」と題する英文の論文を発表している。その脚注に、「Jane Austen, *Sense and Sensibility*, ed. By Robert W. Chapman

(Oxford Univ. Press)』を使用原書としたと記している。1953年までに Oxford University Press から刊行された *Sense and Sensibility* は、*The Novels of Jane Austen* (1923) の第1巻と The World Classics のNo. 389として刊行されたものがある。後者には編者の名はない。したがって、伊吹が「Jane Austen and Sensibility」執筆の際に用いたのは前者ということになる。この版には *Sense and Sensibility* 初版扉の活字ファクシミリが収められており、その下部には「AND PUBLISHED BY T. EGERTON」とあるから、伊吹が『エリナとメアリアン』を訳す際に用いた原書は *The Novels of Jane Austen* 版とも考えられる。ただし、活字ファクシミリ版の扉の発行年は当然のことながら1811となっている。1856年という発行年がどこから出てきたかは依然として謎である。

7-2 『エリナとメアリアン (下)』

訳者 伊吹知勢
初版発行 1948 [昭和23] 年2月10日
発行所 新月社
定価 100円
収録作品 『エリナとメアリアン』 (第30章-第50章)
体裁 18.5×13.2cm。厚紙装、角背、カバー付。
構成 扉、本文 (pp. 5-288)。
解説 *Sense and Sensibility* の本邦初訳本。英米名著叢書13として刊行された。

8 『智慧の花』

訳者 中村佐喜子
初版発行 1947 [昭和22] 年12月15日
発行所 構成社
定価 70円
収録作品 『智慧の花』
体裁 18×12.8cm。紙装、角背。
構成 扉、まへがき (pp. 1-3)、本文 (pp. 1-258)。
解説 *Pride and Prejudice* の抄訳。「世界女流名作選」として刊行された。

中村佐喜子 (1910-1999) は翻訳家で、訳書にヴァージニア・ウルフ『灯台へ』 (新潮文庫、1956 [昭和31] 年8月5日)、モンゴメリ『赤毛のアン』 (角川文庫、1957 [昭和32] 年11月30日)、D. H. ロレンス『恋する女たち』上・下 (角川文庫、1964 [昭和39] 年2月20日) 等がある。角川文庫版『赤毛のアン』の最終頁に中村の略歴が記載されている。「明治43年 (1910) —。札幌に生る本姓石川。札幌高女、日本女子大学本科英文学部卒業。その後小説を書き始め、昭和17年『雪のりんご畑』で改造社の文芸推薦を受け、つづけて二三作発表した。戦争激化とともに中止した。戦後翻訳に従事。」

中村が「世界女流名作選」の1冊としてなぜ *Pride and Prejudice* を選んだかは不明であるが、『智慧の花』という題から、野上弥生子の『虹の花』を読み、原作に興味を抱いたという推測は成り立つ。『智慧の花』の「まへがき」中に、「とりわけ、この小説の主演となつているエリザベスについては、作者自身この上ない愛情を持つて描き、また読者も必ず彼女を愛し尊敬してくれるといふ自信のほどを、オースティン嬢は手紙の中で云っている。」という一文がある。これは『虹の花』の「はしがき」中の「取りわけ女主人公のエリザベスを愛し、『彼女はこれまで印刷に現はれたいかなる人物よりも好ましい。彼女を好きになれないやうな人は我慢できない——』

といった意味の手紙さへ書いてあるほどである」を参考にして書かれたことは明らかである。中村が『虹の花』を読んだのは間違いない。なお、内容的には『智慧の花』は『虹の花』に比べて、ひどく見劣りする。

「世界女流名作選發刊の抱負」と題する刊行の辞が本文最終頁の向かい側の頁に掲載されているので紹介しておく。

この叢書を計畫する本社の意圖は、世界の女性達によつて成された主に文藝作品を、我が國の出来るだけ多くの女性の方々に親しく味わつていたゞきたい爲である。

こうした目的から抄譯を主とし、或る場合には難解な部分に注釋的な文章を余分に書き加へたりするだろうが、それが作品の精神やムードをより忠實に傳へ得て、しかも多忙の方にも分りやすく、楽しんで讀んでいたゞけると信じるからで、この點については譯者達にも特にお骨折りを願ふつもりである。

將來の日本は東西文化の楔にならなければならない。國境を越え、匂ひ高い藝術を通して、全世界の人間の眞心の美しさを共に分ち合うのを喜びとしよう。

国立国会図書館には「世界女流名作選」シリーズとしてはこの1冊のみ所蔵されている。同じシリーズ名で訳者も中村佐喜子のオルコット『若草物語』が1949〔昭和24〕年に刊行されているが、發行所は名曲堂出版部となっている。

9-1 『分別と多感—エリナとメアリアン—（上）』

訳者 伊吹知勢

再版發行 1948〔昭和23〕年8月5日

發行所 新月社

定価 110円

収録作品 『エリナとメアリアン』（第1章—第29章）

体裁 18.5×13.2cm。厚紙装、角背、カバー付。

構成 扉、序（pp.3-8）、本文（pp.13-281）。

使用原書 「Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」

解説 *Sense and Sensibility* の訳本。英米名著叢書12として刊行された。

理由は不明であるが、1947〔昭和22〕年12月15日刊行の『エリナとメアリアン（上）』を再版するに際して、タイトルとカバーの意匠を変更して刊行された。なお、タイトルは、カバーでは『分別と多感—エリナとメアリアン（上）—』、扉では『分別と多感—エリナとメアリアン—（上）』、奥付では『分別と多感（上）—エリナとメアリアン—』となっている。

9-2 『分別と多感—エリナとメアリアン—（下）』

訳者 伊吹知勢

再版發行 1948〔昭和23〕年8月5日

發行所 新月社

定価 100円

収録作品 『エリナとメアリアン』（第30章—第50章）

体裁 18.5×13.2cm。厚紙装、角背、カバー付。

構成 扉、本文（pp.5-288）。

使用原書 「Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」

解説 *Sense and Sensibility* の訳本。英米名著叢書13として刊行された。

1948 [昭和23] 年2月10日刊行の『エリナとメアリアン (下)』(第30章—第50章)と同一である。タイトルは、上巻同様、カバーでは『分別と多感—エリナとメアリアン (下) —』、扉では『分別と多感—エリナとメアリアン— (下)』、奥付では『分別と多感 (下) —エリナとメアリアン—』となっている。

10-1 『虹の花』上巻

著者 野上彌生子

初版発行 1949 [昭和24] 年2月20日

発行所 中央公論社

定価 130円

収録作品 『虹の花』

体裁 18.4×12.9cm。紙装、角背。表紙は青。

構成 扉、はしがき (pp.1-2)、小扉 (pp.3-4)、本文 (pp.5-195)。カット挿画 (小柴錦侍画) 本文中に9葉。

装幀 長谷川瀧二郎

解説 *Pride and Prejudice* の翻案小説。1937 [昭和12] 年12月20日に刊行された『虹の花』を上・下2巻に分け、紙装として刊行したものである。『虹の花』に章立はないが、物語は16部から成っており、各部の冒頭頁に挿画が用いられている。上巻は前半の9部を収める。

10-2 『虹の花』下巻

著者 野上彌生子

初版発行 1949 [昭和24] 年2月20日

発行所 中央公論社

定価 120円

収録作品 『虹の花』

体裁 18.4×12.9cm。紙装、角背。表紙は青。

構成 扉、本文 (pp.3-174)。カット挿画 (小柴錦侍画) 本文中に7葉。

解説 *Pride and Prejudice* の翻案小説。後半7部を収める。

11 『ノーザンガー寺院』

訳者 富田彬

初版発行 1949 [昭和24] 年7月30日

発行所 角川書店

定価 180円

収録作品 『ノーザンガー寺院』

体裁 18.1×12.7cm。紙装、角背。

構成 口絵 (アンドルーズ筆)、扉、本文 (pp.5-293)、あとがき (p.295)。

帯文 「英文學の「細雪」 家庭小説の王座 オースティン女史の作品は、ディッケンズ・サッカレー・ブロンテ姉妹と共に、19世紀イギリス小説の最高峰をなす。それはすべて日常平凡の世界であり、日常の些事が無限の可能性をはらむ世界である。言葉は飽くまで簡素、色彩は心にくいまで淡彩、しかもその中に鋭い心理描寫と穏やかなユーモアと氣品を湛えてある。その6篇の長篇小説はすべて渾然たる傑作で、その筆頭が「ノーザンガー寺院」であり、フローベルや

モーパッサンに花咲いた近代小説の先駆をなすものである。」

解 説 *Northanger Abbey* (1818) の本邦初訳本。B 6版角川文庫18として刊行された。角川文庫は1949 [昭和24] 年5月に発刊されたが、『ノーザンガー寺院』以前に刊行された作品はドストエフスキー『罪と罰』、ゲーテ『若きヴェールテルの悩み』、トルストイ『光あるうち光の中を歩め』、プーシキン『スペードの女王』、ツルゲーネフ『獵人日記』等、日本人読者には馴染みの作家・作品である。したがって、日本人読者には馴染みのないオースティンの作品の、しかも一番未熟な作品を刊行した当時の角川書店の英断に敬意を表したい。

訳者の富田彬は「あとがき」に次のように記している。

ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) は、6篇の長編小説を書いている。わたくしは昭和17年に彼女の後期の作品『説きふせられて』 (*Persuasion*) の翻譯を出したが、今度當書店の好意ある依頼で「ノーザンガー寺院」 (*Northanger Abbey*) といふ初期の作品を出すことになった。これでわたくしはオースティンの小説を2篇手がけたことになるのであるが、2篇ともわが國の讀書界には初めてお目にかかるものである。作者オースティンについては、「説きふせられて」(岩波文庫版)の「解説」で可なり詳しく紹介しておいたから、ここでは繰り返さない。「ノーザンガー寺院」についても、それが當時流行の「恐怖派」小説を揶揄する意圖の下に書かれた一種のパロディであることなどを、その「解説」の中で述べておいた。この小説を読まれる読者は、いやでもそれに氣づかれることと思ふ。

わたくしはこの高級な通俗家庭小説が、日本のあらゆる家庭に備へられ、人生の楽しい伴侶となつてくれればいと、考へてゐる。

12 『ケァサリンの結婚』

訳 者 富田彬

初版発行 1950 [昭和25] 年5月28日

発行所 角川書店

定 価 150円

収録作品 『ケァサリンの結婚』

体 裁 18.1×12.9cm。仏装、角背。

構 成 口絵 (アンドルーズ筆)、扉、本文 (pp. 5-293)、あとがき (p. 295)。

解 説 *Northanger Abbey* の訳本。前年に刊行された『ノーザンガー寺院』の表紙を付け替えただけで刊行されたもの。『ノーザンガー寺院』のタイトルでは売れないとの判断から、急遽改題となったのであろう。それを裏付けるかのように、「あとがき」も『ノーザンガー寺院』のそれと全く同一で、作品名も『ケァサリンの結婚』ではなく『ノーザンガー寺院』がそのまま使われているという杜撰さである。また、この訳本は単行本として刊行された。したがって、これを角川文庫とする紀田順一郎・谷口雅男監修『ニッポン文庫本大全』(ダイヤモンド社、1997 [平成9] 年11月20日)の記述は誤りである。

13-1 『高慢と偏見』上巻

訳 者 富田彬

初版発行 1950 [昭和25] 年8月30日

発行所 岩波書店

定 価 90円

収録作品 『高慢と偏見』(第1章-第37章)

体 裁 14.9×10.5cm。紙装、角背、パラフィン、帯。

構 成 扉、「まえがき」(pp.3-4)、本文(pp.7-329)。

使用原本 「わたくしが使用した原本は、The Complete Novels of Jane Austen, (William Heinemann, 1928.)である。」

解 説 *Pride and Prejudice* の訳本。「岩波文庫」4095-4097赤247として刊行された。

ある時期から、帯に惹句が印刷されるようになった。架蔵するものの中で一番古いものは1967 [昭和42]年4月20日第23刷発行で、帯に「地主ベネット一家を中心とする恋のやりとりは、明るいユーモアが漂う。デリケートな心理描写にすぐれているオースティンの代表作。」とある。

13-2 『高慢と偏見』下巻

訳 者 富田彬

初版発行 1950 [昭和25]年12月1日

発行所 岩波書店

定 価 90円

収録作品 『高慢と偏見』(第38章-第61章)

体 裁 14.9×10.5cm。紙装、角背、パラフィン、帯。

構 成 扉、本文(pp.5-268)、「解題」(pp.269-271)。

解 説 *Pride and Prejudice* の訳本。「岩波文庫」4098-4100赤248として刊行された。

架蔵するものの中で、帯文が印刷された一番古いものは1967 [昭和42]年4月20日第22刷発行で、「田舎の村の家庭生活を整った明確な描写で表現したこの作品が、21歳のうら若き女性の手になったことは全く驚嘆の他ない。」とある。

14 『エリナとメアリアン—分別と多感—』

訳 者 伊吹知勢

初版発行 1952 [昭和27]年5月30日

訳 者 伊吹知勢

発行所 河出書房

定 価 250円 地方定価260円

収録作品 『エリナとメアリアン—分別と多感—』

体 裁 18.5×13.5cm。厚紙装、丸背、函付。

構 成 扉、口絵肖像、本文(2段組、pp.3-270)、解説(pp.271-280)。

月 報 中村真一郎「オースティンと幻影」(4段組、pp.1-2)

海老池俊治「ジェイン・オースティン」(4段組、pp.3-4)

天達文子「伊吹知勢さん」(4段組、p.4)

使用原書 「Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」

解 説 *Sense and Sensibility* (1811) の訳本。「世界文学全集(19世紀続編)」全20巻(1951-1952)内の第10巻(第10回配本)として刊行された。

先に見た、『エリナとメアリアン(上)』(新月社、1947 [昭和22]年12月15日)と『エリナとメアリアン(下)』(新月社、1948 [昭和23]年2月10日)とを1巻にまとめて刊行したものである。ただし、「解説」は『エリナとメアリアン(上)』の「序」を大幅に加筆修正したものとなっている。

月報の「編集部だより」に、「訳者伊吹先生は現在お茶の水女子大学でお教えになっておられ

るかたわら、旧訳を殆ど逐語的に改訳されて一層原作のこまやかな味わいを訳出するのに努力されました。」とある。第1章の訳文を新月社版のそれと比較してみると、表記を改めた以外、改訳と呼べるほどの訂正箇所はほとんど見あたらなかった。一例を挙げておく。「彼等一同に對する愛着は日毎にまして行つた。」(新月社版)、「彼ら一同に對する愛着は日ごとにまして行つた。」(新月社版)

『オースティンとウルフ——伊吹知勢論文集——』の「伊吹知勢略歴」によれば、1952〔昭和27〕年3月31日にお茶の水女子大学東京女子高等師範学校廃止により、伊吹は同年同月にお茶の水女子大学文教育学部講師になっている。

函付以外にカバー付のものも同時に刊行された。カバーには「世界文学全集(19世紀続編)」の文字が印刷されていない。あるいは、全集とは別に単行本として販売されたのかもしれない。

なお、この作品は月報の「編集部だより」で次のように紹介されている。

波瀾重疊、手に汗握る雄大な構想をもつた男性的な小説である「モンテ・クリスト伯」上巻の配本について、今回は密畫を仔細に眺めて、見とれるようなそのきめの美しさに思わず歎聲を洩らすといった女性的な小説「エリナとメアリアン」(原題「分別と多感」)を配本いたします。「エリナとメアリアン」の二人のヒロインが、大した事件もない一見平凡な中流生活の中に生きながら、どのようにものを考え、行動するかはJ・オースティンの才筆によつて、心にくいほど完璧に描き分けられています。この小説をたのしむ心のゆとりは私たちのあわただしい生活にとつて是非なくてはならぬもので、ある意味では教養の試金石であり、又イギリスの小説史の上でも性格描寫の點で類を見ない傑作であると言われています。

15 『オースティン 自負と偏見・ブロンテ 嵐が丘』

訳者 中野好夫・大和資雄

初版発行 1960〔昭和35〕年1月30日

発行所 筑摩書房

定価 450円

収録作品 『自負と偏見』(中野好夫訳)、『嵐が丘』(大和資雄訳)

体裁 22.5×16cm。クロス装、丸背、パラフィン、函。

構成 巻頭口絵 オースティン肖像画(カサンドラ筆)、扉、本文(3段組、pp.5-423)。

『自負と偏見』本文(3段組、pp.5-227)

『嵐が丘』本文(3段組)(pp.231-423)

「ジェイン・オースティン」(デイヴィッド・セシル、青木雄造訳、3段組、pp.424-436)

「エミリ・ブロンテ」(チャールズ・モーガン、青木雄造訳、3段組、pp.437-447)

「解説(オースティン)」(中野好夫、3段組、pp.448-452)

「解説(ブロンテ)」(大和資雄、3段組、pp.453-456)

「オースティン年譜」(小池滋編、3段組、pp.457-460)

「ブロンテ年譜」(小池滋編、3段組、pp.461-463)

装幀 庫田焜

月報

近藤いね子「オースティンのこと」(2段組、pp.1-2)

大沢実「エミリ・ブロンテの世界」(2段組、pp.2-4)

海老池俊治「ジェイン・オースティン」(2段組、pp.4-7)

研究書目・参考文献(2段組、pp.4-7)

「連載 世界文学史(27)」(平井正穂) (2段組、pp.8-12)

『自負と偏見』と『嵐が丘』の主要人物を記したしおり付き。

解説 *Pride and Prejudice* の訳本。「世界文学大系」全96巻別巻2 (全102冊) (1958-1968) 内の第28巻 (第27回配本) として刊行された。なお、17刷 (1969 [昭和44] 年) では第50巻となっている。「月報」の「編集後記」に「1960年の最初の配本として『オースティン・ブロンテ集』をお届けします。『自負と偏見』は中野好夫先生の最新訳になるもので、正統英国小説の典型といわれる此の作品の魅力を、はじめて完全に伝えるものです。『嵐が丘』はすでに定評のある大和資雄先生の訳で収めました。世界文学史上、欠かすことの出来ない二人の女流作家の傑作を味わっていただきたくと存じます。」とある。

中野訳『自負と偏見』はまさに名訳である。福原麟太郎によれば、「漱石は『文学論』の中でジェイン・オースティンを非常にほめている。(中野好夫氏のオースティン訳『自負と偏見』は、それほどまでに漱石のほめるオースティンをそれに値するように訳してみようとした名訳である。)」(『夏目漱石』荒竹出版、昭和48 [1973] 年9月25日、p.129)。

中野自身、この作品を訳すに際しての苦勞ぶりを次のように記している。

「オースティンの『自負と偏見』を手がけるときの、実は訳出にかかる前の方が苦勞した。なにしろ漱石すらカブトを脱いだほど、これといった事件も起こらなければ、波瀾もない。まことに淡々とした日常茶飯事ばかりを語って、しかもにじみ出るようなお茶漬の味わいとユーモアを出している。そのしみじみとした軽みとでもいうか、これをいったい原作の妙味などという言葉訳は抜きにして、訳文そのまま伝えるには、どうすればよいか。自家広告ではないが、実に苦慮した。幸いにその後書評で、オースティンの面白さがはじめてわかった、読み出して、巻も措かずに読了したと書いてくれた人もあり、やはりわれながら嬉しかった。いちばん困った代物だけに、誤訳の懸念など忘れてホッとした。」(「翻訳雑話」『英文学夜ばなし』新潮選書、1971 [昭和46] 年12月15日、p.119.)

「月報」の訳者紹介の中に、中野好夫は「前東大教授、評論家」とある。中野が「六人の家族をかかえて、大学教授では食えない」として東大教授の職を辞したのは1953 [昭和28] 年のことであった。

16-1 『自負と偏見』上巻

訳者 中野好夫

初版発行 1963 [昭和38] 年6月30日

発行所 新潮社

定価 100円

収録作品 『自負と偏見』(第1章-第33章)

体裁 15×10.6cm。紙装、角背、パラフィン、帯。

構成 扉、本文 (pp.5-278)。

解説 *Pride and Prejudice* の訳本。「新潮文庫」1597赤131Aとして刊行された。1960 [昭和35] 年1月30日刊行の世界文学大系「第28巻『オースティン 自負と偏見・ブロンテ 嵐が丘』の『自負と偏見』の前半を新潮文庫として刊行したものである。初版の帯に惹句はない。何刷から帯に惹句が入るようになったか定かではないが、架蔵の1970 [昭和45] 年7月20日9刷の帯には「二人の娘ジェーンとエリザベス、その自負と偏見がもたらす愛の行方は? ユーモアに溢れる軽妙、写実的な筆で描く英文学の傑作。」とある。

時期は特定できないが、1970 [昭和45] 年以降にカバーが付くようになった。架蔵の昭和47年

1月20日11刷のカバーには次のような解説が印刷されている。

平和な田舎町に生きる人々、その弱点や欠点を寛大な心で包みながら諷刺し、爽やかな笑いを呼ぶ。——オースティン文学の魅力はそこにある。本編は年頃の5人の娘をもつベネット家の隣に、青年紳士ビングリーが引越してきたところから始まる。内気で美しいジェインと才気あふれるエリザベス、明朗なビングリーとその親友で気難し屋のダーシー。豊かな個性を完璧な写実方法で描く。

16-2 『自負と偏見』下巻

訳者 中野好夫

初版発行 1963 [昭和38] 年6月30日

発行所 新潮社

定価 110円

収録作品 『自負と偏見』 (第34章—第61章)

体裁 15×10.6cm。紙装、角背、パラフィン、帯。

構成 扉、本文 (pp.5—293)、解説 (pp.294—305)。

解説 *Pride and Prejudice* の訳本。「新潮文庫」1598赤131Bとして刊行された。

下巻の解説は「世界文学大系」第28巻『オースティン 自負と偏見・ブロンテ 嵐が丘』のものと同じである。上巻同様、初版の帯に惹句はない。架蔵の1970 [昭和45] 年5月30日10刷の帯にも惹句はない。

架蔵の昭和46年10月10日12刷のカバーには次のような文章が印刷されている。

エリザベスが高慢で鼻もちならぬ男と考えていたミスタ・ダーシーは、実は誠実で賢明な紳士だった。自分の偏見に気づいた彼女は、素直な反省と不思議な胸のときめきを感じながら、ミスタ・ダーシーを改めて見直すのだった。一方姉のジェインとビングリーも、障害を克服し着実に愛情をはぐくんでいった……。日常生活にありふれた感情や人物を鋭い観察眼で天衣無縫に写した名編。

17 『高慢と偏見』

訳者 阿部知二

初版発行 1963 [昭和38] 年12月10日

発行所 河出書房新社

定価 360円

収録作品 『自負と偏見』

体裁 18×12.5cm。クロス装、丸背、ビニールカバー、帯、函付。

構成 口絵肖像 (カサンドラ筆)、写真9葉。主要人物一覧表 (p.2)、本文 (pp.3—399)、ジェイン・オースティン年譜 (2段組、pp.401—403)、解説 (2段組、pp.405—425)。

月報 山本健吉「『高慢と偏見』の作者」 (2段組、pp.1—4)

海老池俊治「オースティンの小説」 (2段組、pp.4—6)

「参考書目」 (2段組、p.6)

帯文 (表) 「恋を夢みる五人姉妹の理想の男性と結婚の条件は？」

帯文 (裏) 「モームが世界十大小説にえらんだ「高慢と偏見」は、じつにあかるく楽しく、おもしろい小説です。19世紀はじめのロンドン郊外の田園に住む五人姉妹のベネット家を中心に、おとなしい長女ジェインと才気あふれる次女エリザベスの愛のめばえ、誤解、愛の告白から結婚まで

のいきさつを、発刺とした知性とユーモアとウィットで描き、読みはじめたらやめられぬふしぎな魅力にとんだ作品です。ブロンテ姉妹に先立つこと半世紀の英国にこの天衣無縫のリアリズム小説が一女性によって書かれたことだけでも奇蹟といえます。」

帯文は1967〔昭和42〕年7月10日4版発行に付属の帯によった。初版に帯があったかどうかは不明である。

使用原書 「テキストにはチャップマン博士校訂のオックスフォード大学出版部版を使用した。また、研究社英文学双書の岡田、伊吹氏注釈の『Pride and Prejudice』、岩波文庫の富田彬氏訳の『高慢と偏見』、Eugene Rocart によるフランス訳『Orgueil et Préjugés』等を参考とした」

解 説 *Pride and Prejudice* の訳本。「グリーン版 世界文学全集」第2集全25巻(1963-64)内の第6巻(第13回配本)として刊行された。

『高慢と偏見』が刊行される半年程前、阿部知二(1903-1973)は雑誌『群像』(昭和38年5月特大号<200号記念、創作特集>)に「高慢と偏見」と題する短篇を発表している。人間誰しも自惚れの強い存在であるが、特に語学力で相手の自惚れを傷つけると、その恨みは想像を絶するほど凄まじいものとなるといったことを二人のインテリが議論し合うといった作品である。

『高慢と偏見』に、ヒロインのエリザベスが親友のシャーロット・ルーカスや妹のメアリーたちと *pride* や *vanity* について議論し合う場面があるから、このあたりを参考にしたのかもしれない。

中野好夫は東京帝国大学文学部英文科で阿部知二の一年先輩であり、卒業後も英文学研究会や『詩と詩論』の同人として親しく接していた。その中野が、『阿部知二全集』第13巻(河出書房新社、1975年7月15日)に寄せた「解説」の最後で、次のように述べている。「これら二人の女流作家〔ジェイン・オースティンとシャーロット・ブロンテ〕をどうして選んだのか、ほくは一切事情を知らぬ。あるいは出版社の企画(いずれも世界文学全集の一冊である)による割当てにすぎなかったのかもしれぬ。ほくにも経験はあるが、翻訳などすべて自発的に選択するものとはかぎらぬ。おそらく事情は、そんなところではなかったかと思う。」(p.332)また、阿部は『高慢と偏見』の「解説」の最後に、「この翻訳をするに当って、皆河宗一氏の協力を仰ぎ、松村達雄氏の教示をうけた。」と謝辞を記している。この二つを総合すると、『高慢と偏見』の実質的な訳者は皆河宗一で、阿部は名義を貸しただけとの結論になる。皆河宗一(1920-)はポール・ラディンほか『トリックスター』(晶文全書、1974〔昭和49〕年9月25日)の共訳者の一人であるが、奥付の略歴に「1920年栃木県生まれ。広島大学英文科卒業。現在、明治大学教授。著書—『アメリカ・フォークソングの世界』(岩崎美術社)ほか。訳書—トムスン『アメリカ・インディアン』(岩崎美術社)ほか。」とある。

月報執筆者の山本健吉はこの年の5月に『小説の再発見』(文芸春秋新社、1963〔昭和38〕年5月20日)を刊行している。この本はW・S・モーム著、西川正身訳『世界の十大小説』上・下(岩波新書、1958〔昭和33〕年11月17日)に刺激されて書かれた。帯惹句にもあるように、モームは世界の十大小説の一つとして *Pride and Prejudice* を絶賛している。山本はこの小説に興味を持ち、「世界文学大系」第28巻『オースティン 自負と偏見・ブロンテ 嵐が丘』で初めて『自負と偏見』を読み、いたく感銘を受け、『小説の再発見』所載の「『自負と偏見』の微笑」を書いた。この文章が河出書房新社編集部の目に留まり、月報掲載の文章執筆を依頼されたと考えられる。

『自尊と偏見』上(弘文堂、1940〔昭和15〕年7月15日)の訳者海老池俊治は本訳書刊行の前年に『Jane Austen 論考』(研究社、昭和37年7月25日)を刊行している。

使用原書中に見える「Eugene Rocart によるフランス訳『Orgueil et Préjugés』」は、「Orgueil et préjugés. Bruxelles : Éditions La Boétie, 1945. pp. 221. Translated by Eugène Rocart. Re-issued in

1954 by Gérard, Verviers & Paris, in the 'Marabout' paperback series, pp.278, and again in 1962 by the same publisher in the 'Marabout Géant' series, pp.376.] (D. Gilson, pp.190-191) であろう。

「研究社英文学双書の岡田、伊吹氏注釈の『Pride and Prejudice』』とは、伊吹知勢が岡田美津注釈『Pride and Prejudice』に改訂補注を施して刊行された研究社英文学叢書第14巻『Pride and Prejudice, vol. I』と第15巻『Pride and Prejudice, vol. II』である。両巻とも1957 [昭和32] 年1月20日に刊行された。

18 『オースティン エマ』

訳者 阿部知二

初版発行 1965 [昭和40] 年4月10日

発行所 中央公論社

訳者 阿部知二

定価 390円

収録作品 『エマ』

体裁 17.7×12.5 cm。クロス装、丸背、ビニーカバー、帯、函付。

構成 口絵肖像（カサンドラ筆）、扉、本文（2段組、pp.5-472）、フィリップ・ゴフ（マクドナルド版）の挿画34葉。解説・年譜（阿部知二）（pp.474-494）、写真10葉。

月報 野上弥生子「はじめてオースティンを読んだ話」（2段組、pp.1-2）

篠田一士「無条件に近い「脱帽」（2段組、pp.2-6）

山本健吉「日本の読書人とオースティン」（2段組、pp.6-9）

江藤淳「政治小説としての『パルムの僧院』」（2段組、pp.10-11）

「読書の手引き」（pp.10-11）（写真6葉）

「主な登場人物」が印刷されたしおり付き。

帯文（裏）「年若く美貌の女主人公をめぐるイギリス田園の社交生活を、鋭敏な感性と軽妙な機知で描き、快いユーモアと明るさが横溢する。モームによって「世界十大小説家」の一人に数えられ、「小説家として持ちうるもっとも貴重な才能の持主」と評された作家の最高傑作。（フィリップ・ゴフ画34枚入）」

使用原本 「テキストは、R・W・チャップマン博士編纂の「ジェイン・オースティン」小説集（5巻、オクスフォード大学出版部、初版1923年）の第4巻「エマ」を使用した。……挿画はマクドナルド版、フィリップ・ゴフ画を掲載した。口絵のオースティン像は姉カサンドラが描いたもの（ロンドン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー蔵）である。」

解説 *Emma* (1815) の本邦初訳本。「世界の文学」全54巻（1963-67）内の第6巻（第27回配本）として刊行された。「解説」の「後記」に「皆河宗一明治大学教授、阿部良雄中央大学助教授の協力を得た。」とある。「グリーン版 世界文学全集」の一つとして刊行された阿部知二訳『高慢と偏見』（河出書房新社、1963年）の場合同様、皆河宗一が実質的な訳者であり、その手助けをしたのが阿部良雄であったと考えられる。「挿画はマクドナルド版、フィリップ・ゴフ画を掲載した」とあるが、このマクドナルド版とは、*Emma, Illustrated by Philip Gough, London: Macdonald & Co. Ltd., 1948* である。

「解説」中に「姉カサンドラ」とある肖像画はオースティンの兄エドワードの妻エリザベス・オースティン（旧姓ブリッジズ）のものである。

月報に掲載の「はじめてオースティンを読んだ話」で、野上弥生子が漱石から *Pride and Prej-*

udice の原書を借りて初めて読み、深い感銘を得たことについて述べていることはすでに指摘した。では、中央公論社はなぜ弥生子にオースティンに関する文章の執筆を依頼したのだろうか。弥生子の著作年譜や日記を調べてみると、当時の弥生子は中央公論社とかなり関わりがあったことがわかる。たとえば、弥生子は「秀吉と利休」を『中央公論』第77年第1号（1962〔昭和37〕年1月）から第78年第9号（1963〔昭和38〕年9月）まで毎月発表し、1964〔昭和39〕年2月8日に単行本として刊行した。また、同年3月12日に刊行された「世界の文学」第20巻『アンナ・カレーニナⅡ』の月報に「私と『アンナ・カレーニナ』」を寄せている。推測するに、『秀吉と利休』を『中央公論』に連載中に原稿を取りに来た中央公論社の編集者に漱石に勧められて *Pride and Prejudice* を読んだことなどを語り、それがきっかけとなり月報掲載の文章を依頼されたのであろう。弥生子は1965〔昭和40〕年2月17日の日記に「中央の世界文学の月報のためオースティンについて書く。」（『野上彌生子全集』第Ⅱ期第15巻「日記15」、岩波書店、1989〔平成1〕年7月27日、p.30）と記している。

弥生子は「はじめてオースティンを読んだ話」の前半で、漱石に勧められて *Pride and Prejudice* を読み深い感銘を受けた思い出を記し、後半では、*Pride and Prejudice* の文学的評価にふれている。

『プライド・エンド・プレジューディス』の文学的価値についてはあらためて説くまでもない。女流作家の陥りがちな感傷を見事に脱し、平明簡潔で、ユーモアに富み、戯曲的なまでに巧みな構成と推移で、登場人物の一人一人がいかに生き活きと描きだされている。こうして彼女はシェイクスピアにまで比較されるが、とりわけジェーン・オースティンは『プライド・エンド・プレジューディス』を「自分の子供」と呼び、知性的で慧敏に美しい女主人公のエリザベスは、ほんとうにそうした娘が存在していたかのように愛していたといわれる。まことに英国の近代の戯曲、小説を通じてこの愛娘はもっとも魅力ある女性とすべきであり、仮りに今日の世界にマクベス夫人やオフェリアを連れて来たらどんな生き方をするか疑われるが、エリザベスなら結構あのままの姿でも現在のロンドンのまん中でもはつらつと闊歩されそうに思えるし、もしかしたらオーダマストンからの反核武装のデモの行進にも交っているような気さえする。

上の引用中、「ジェーン・オースティンは『プライド・エンド・プレジューディス』を「自分の子供」と呼び、知性的で慧敏に美しい女主人公のエリザベスは、ほんとうにそうした娘が存在していたかのように愛していたといわれる。」は、野上豊一郎訳『高慢と偏見』上巻の「はしがき」の「彼女は『高慢と偏見』を自分の「可愛い子供」だと呼び、殊にその女主人公エリザベスをば、實在の人間ででもあつたかの如く考へて彼女自ら非常にそれを愛してゐたと云はれてゐる。」（p.2）という箇所とほぼ同じ言い方であることが分かる。

また、「仮りに今日の世界にマクベス夫人や云々」は、弥生子が昭和12年12月20日に中央公論社から刊行した『高慢と偏見』の翻案『虹の花』『はしがき』の中に記した「彼女はまたバーナード・ショーなどの描く新しい婦人の先驅者とされてゐるだけに、他の古典の女性には感じられない一種特別な親しさで私たちを打つのである。私たちは彼女が19世紀の、それもやつと初めの頃に生きた小説中の人物であることをしばしば忘れる。今日の私たちの銀座の舗道を歩かしても、彼女はもつと生き活きた魅力に輝いて見えるであらう。」というエリザベス像を、1965〔昭和40〕年当時の時代状況に合わせて書き換えたと考えられる。さらに、今引用した『虹の花』の「はしがき」の一節は、『高慢と偏見』上巻の「はしがき」の次の箇所を基にして書かれたものである。

バーナード・ショーは自分の先輩として数名の天才の名を挙げた中に、スウィフトやバン

ヤンと共にゼーン・オースチンの名を擧げることが忘れなかつた。ショーの擧げた名前はいづれも社会改造者としての大いなる精神を持った人たちのみであつた。その中にゼーン・オースチンを数へたことは彼女の作意の中に可なり強い習俗諷刺の意志が讀まれるからである。『高慢と偏見』の女主人公エリザベスの如きは今日ショー等の強調する新しき女の間にならしては毫も遜色なき理知的な進取的な、またショーの所謂最も女らしき女の一人であることを讀者はやがて看取するであらう。(pp.6-7)

主要参考文献

- 『阿部知二全集』第8巻(河出書房新社、1975〔昭和50〕年6月15日)
『阿部知二全集』第13巻(河出書房新社、1975〔昭和50〕年7月15日)
池田哲郎『日本英学風土記』(篠崎書林、1979〔昭和54〕年7月)
石塚虎雄『ジェイン・オースティン研究』(興文社、1969〔昭和44〕年4月15日)
石塚虎雄『ジェイン・オースティン小説論』(篠崎書林、1974〔昭和49〕年8月25日)
伊吹知勢『オースティンとウルフ——伊吹知勢論文集——』(伊吹令人、1984〔昭和59〕年4月11日)
『岩波文庫総目録 1927-1987』(岩波書店、1987〔昭和62〕年7月16日)
榎本みな子『オースティンの小説とその周辺』(英宝社、1984〔昭和59〕年12月10日)
海老池俊治『Jane Austen論考』(研究社出版、1962〔昭和37〕年7月25日)
大内脩二郎『英米文学評傳叢書37 ジェイン・オースティン』(研究社、1934〔昭和9〕年8月20日)
大島一彦『ジェイン・オースティン 「世界一平凡な大作家」の肖像』(中公新書、1997〔平成9〕年1月25日)
岡田みつ註訳『Pride and Prejudice』(研究社、1923〔大正12〕年3月20日)
落合雄三編『栃木県近代文学アルバム』(栃木県文化協会、2000〔平成12〕年7月15日)
笠原勝郎『英米文学翻訳書目 各作家研究書付』(沖積社、1990〔平成2〕年7月7日)
笠原勝郎『昭和を彩った英文学者たち——生涯と書誌』(沖積社、1996〔平成8〕年12月18日)
近藤いね子『英國小説と女流作家——オースティンとウルフ——』(研究社出版、1955〔昭和30〕年12月25日)
国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』(風間書房、1959〔昭和34〕年9月25日)
塩谷清人『ジェイン・オースティン入門』(北星堂書店、1997〔平成9〕年3月18日/増補版2001〔平成13〕年3月21日)
鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』(成美堂、1995〔平成7〕年1月25日)
『成蹊英語英文学研究』第4号(成蹊大学文学部学会、2000〔平成12〕年3月25日)
『世界名作大観豫約募集見本及規定』(国民文庫刊行會、1925〔大正14〕年3月)
『漱石全集』第9巻「文學論」(岩波書店、1966〔昭和41〕年8月23日)
惣谷美智子『ジェイン・オースティン研究——オースティンと言葉の共謀者達——』(旺史社、1993〔平成5〕年6月20日)
田辺昌美『ジェイン・オースティンの文学』(あぼろん社、1965〔昭和40〕年2月1日)
田辺昌美『改訂 ジェイン・オースティンの文学』(あぼろん社、1981〔昭和56〕年10月25日改訂版2刷)
田村道美「漱石と豊一郎・弥生子——*Pride and Prejudice*をめぐって——」『香川大学教育学部研究報告第I部』第84号(香川大学教育学部、1992〔平成4〕年1月)
田村道美「野上弥生子と「世界名作大観」(五)——『高慢と偏見』上巻——」『香川大学教育学部研究報告第・部』第93号(香川大学教育学部、1995〔平成7〕年1月)
田村道美『野上弥生子と「世界名作大観」——野上弥生子における西欧文学受容の側面——』(香川大学教育学部研究叢書7、1999〔平成11〕年1月)

- 田村道美 [ほか] 『絶版文庫三重奏』 (青弓社、2000 [平成12] 年9月15日)
- 津田塾大学「文学研究」同人編著『ジェイン・オースティン——小説の研究——』 (荒竹出版、1981 [昭和56] 年4月20日)
- 東大英文学研究会編『オペロン』第2巻第1号 (オペロン社、1938 [昭和13] 年1月13日)
- 東大英文学研究会編『オペロン』第2巻第2号 (オペロン社、1938 [昭和13] 年8月1日)
- 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説——女主人公をめぐる——』 (開文社出版、1986 [昭和61] 年3月30日)
- 中村真一郎『本を読む』 (新潮社、1982 [昭和57] 年7月20日)
- 日外アソシエーツ編『世界文学綜覧シリーズ1 世界文学全集・内容綜覧』上・下 (日外アソシエーツ、1986 [昭和61] 年2月10日)
- 日外アソシエーツ編『世界文学綜覧シリーズ2 世界文学全集・作家名綜覧』上「西洋人名」 (日外アソシエーツ、1986 [昭和61] 年5月10日)
- 日外アソシエーツ編『世界文学綜覧シリーズ3 世界文学全集・作家名綜覧』上・下 (日外アソシエーツ、1986 [昭和61] 年7月10日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳図書目録45/76 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、1991 [平成3] 年3月25日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳図書目録77/84 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、1984 [昭和59] 年12月25日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳図書目録84/88 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、1988 [昭和63] 年7月22日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳図書目録88/92 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、1992 [平成4] 年12月21日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳図書目録92/96 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、1997 [平成9] 年7月25日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳図書目録1996-2000 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、2000 [平成12] 年1月26日)
- 日外アソシエーツ編『全集・合集収載翻訳図書目録45/75 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、1996 [平成8] 年5月20日)
- 日外アソシエーツ編『全集・合集収載翻訳図書目録76/92 Ⅲ. 芸術・言語・文学』 (日外アソシエーツ、1996 [平成8] 年4月21日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報45/92』 (日外アソシエーツ、1994 [平成6] 年1月20日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報93/97』 (日外アソシエーツ、1999 [平成11] 年2月26日)
- 日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報1998-2000』 (日外アソシエーツ、2001 [平成13] 年9月25日)
- 野上豊一郎「「誇と偏見」について」『英語文學』第3巻第4號 (緑葉社、1919 [大正8] 年4月5日)
- 『野上彌生子全集』第23巻「評論・随筆6」 (岩波書店、1982 [昭和57] 年4月7日)
- 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第1巻「日記1」 (岩波書店、1986 [昭和61] 年11月6日)
- 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第2巻「日記2」 (岩波書店、1986 [昭和61] 年12月8日)
- 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第15巻「日記15」 (岩波書店、1989 [平成1] 年7月27日)
- 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第21巻「翻訳4」 (岩波書店、1987 [昭和62] 年9月7日)
- 長谷川なほみ「Jane Austen翻訳書目」『文献探索 2000』 (金沢文圃閣、2001 [平成13] 年2月23日)
- 樋口欣三『ジェーン・オースティン——喜劇的ヴィジョンの展開——』 (英宝社、1984 [昭和59] 年3月1日)

蛭川久康著訳『講座イギリス文学作品論3 ジェイン・オースティン』（英潮社、1977 [昭和52] 年7月1日）

藤田清次『評伝 ジェーン・オースティン』（北星堂書店、1981 [昭和56] 年3月20日）

宮崎孝一『オースティン文学の妙味』（鳳書房、1999 [平成11] 年3月21日）

森田草平『續夏日漱石』（甲鳥書林、1943 [昭和18] 年11月10日）

柳内茂雄『オースティンの手法』（リーベル出版、1988 [昭和63] 年11月22日）

G・K・チェスタトン著、安西徹雄訳『G・K・チェスタトン著作集8 ヴィクトリア朝の英文学』（春秋社、1979 [昭和54] 年4月11日）

クレア、トマリソ著、矢倉尚子訳『ジェイン・オースティン伝』（白水社、1999 [平成11] 年10月5日）

ディアドリ、ル・フェイ著、川成洋監訳・太田美智子訳『大英図書館シリーズ作家の生涯 図説ジェイン・オースティン』（ミュージアム図書、2000 [平成12] 年。月日の記載なし。）

The Novels of Jane Austen. 10 vols. Edited by R. B. Johnson. London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1892.

The Novels (Works) of Jane Austen. 6 vols. Edited by R. W. Chapman. London: Oxford University Press, 1923
-54 [reprint 1973].

Austen, Jane. *Pride and Prejudice.* London: Macmillan & Co. 1898.

_____. *Pride and Prejudice.* Everyman's Library, 1906 [reprint 1941].

_____. *Love and Freindship and Other Early Works,* now first printed from the original MS. with a preface by G. K. Chesterton. [London]: Chatto & Windus, 1922.

Gilson, David. *A Bibliography of Jane Austen.* Oxford: Clarendon Press, 1982.